

總持寺五院の成立と展開（三）

鶴見大学仏教文化研究所顧問 納富 常天

はじめに

『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第十四号（平成二十一年四月発行）に（1）五院の成立時期について、（2）總持寺輪住制の変容、（3）『普藏院住番牒』とその問題点を取り上げ、私見を述べた。とりわけ（3）では『普藏院住番牒』を翻刻するとともに、これに対応する『總持寺住山記』を掲げ、普藏院輪住の実情を考察した。また、第十六号（平成二十三年三月発行）には、五院による總持寺の護持と管理運営について概観した上、『妙高庵輪住誌』を翻刻するとともに、これに対応する『總持寺住山記』を掲げながら、その問題点を取り上げるなど、妙高庵輪住の実情を考察した。ここではその後の調査で、『總持寺住山記』の成立などについて、新しい知見を得たので、これを報告するとともに、前号と同じように『洞川庵輪住誌』を翻刻し、これに対応する『總持寺住山記』を掲げ、その実情と問題点を考察する。

（一）『總持寺住山記』の概要

『總持寺住山記』の成立について述べる前に、その概要について考察する。『總持寺住山記』は通称で、正しくは巻一の内題にあるように、『總持禪寺開山以来住持之次第』（以下『住山記』と略称）である。これは書名からもわ

かるように、開山瑩山禪師から明治三年（一八七〇）七月二十五日、四万九千七百六十六世大仙和尚までの輪住者、およびその後明治三十四年七月二十八日、五万九千九百八十世（実質五万九千九十八名）瑞巖和尚までの瑞世者記録で、百四十冊からなる。しかし巻百三十四（四万八千九百八十一世〜四万九千四百九十世）が散逸しており、さらに巻百六が巻百五の紙背にあるのみならず、巻百十が二と二に分冊されているから、実質百三十九冊である。装丁は折本装で、法量は縦三二・三〜三三・七糎、横一六・八〜二〇・四糎である。なお巻四十五〜巻六十六（巻四十六・四十八・五十一・五十七を除く）には料紙に罫線がある。

また保存のため裏打を施し、汚破損の部分修復（近代か）しているが、表紙（主として紺・濫皮）など努めて原装（表紙裏に金銀砂子・切箔など）を残しているものもあるが、極一部については文字まで切断するなど、技術的に稚拙で粗雑なものも少なくない。巻一については、開山瑩山瑾和尚から七十一世惟忠勤和尚（永享二年へ一四三〇）八月十二日入寺）まで損傷が甚だしかったらしく、前表紙裏に「住山比丘宗葩謹誌」とあるように、七十二世春谷宗葩（永享二年十一月十九日入寺）が書き改めている。しかし何故か七世（三十七・四十五・五十三・五十五・六十三・六十四・七十一世）の法名の上に落款があるが、落款は巻一と巻二（二百二十七世〜六百二十九世）の前半を中心として、三十七世大林棟から千九十二世筠溪洪まで断続的に法名の上に落款がある。記録の内容は、最初期は世代数、輪住者名、嗣法師名のみであるが、やがて受業師名、入寺年月日、国名、門派名、寺院名も記録されるようになるが、その初見は三千三十四世観州泰察（駿州□明寺）である。また七十三世英巖傑和尚（永享三年へ一四三二）二月十三日入寺）以降一筆でないから、ある時期までは自署したと思われる。しかし時代が下るにしたがい、極めてわずかではあるが、摩り消しなどによる法名の訂正^①、世代の重複や飛び、世代数や門派名のみあつて輪住者名が欠落しているもの、成直^④などによる挿入、あるいは次項（二）に掲げる記録や補注などをみると、早い時期から、五院の維那の統轄下で公文書記が記録していたことがわかると同時に、記録の形式なども変容し

ている。

また公文書記は覚書により清書したらしく、その間における誤写や、曖昧な表記^⑥、公文書記自身の癖字や劣悪な筆体、さらには記録にあたつての用字（字体）も、正字（本字）、俗字（土^①土、栢^②柏など）、略字、古字（志^③仁、詰^④哲、訃^⑤辯など）、異体字（崑^⑥巖、蜚^⑦北など）、国字、あて字などにわたつており、解説に苦しむものも少なくない。なお国名（出身地）の表記にあたり、能登を本州と能州、奥州を細かく南部・岩（磐）城・仙台、伊賀を伊州と賀州、三州と参州、また門派名も源翁と玄翁、法王と鳳王としている。また何故か文政八年（一八二五）二月二十二日輪住者二名であるにも拘らず、巻百十三に一名、巻百十四に一名、さらに嘉永五年（一八五二）八月二十三日輪住者十三名も巻百二十五に四名、巻百二十六に九名に分割記載されているのみならず、巻百十の二（文化十三年へ一八一六）や巻百二十二（弘化四年へ一八四七）尾には、予め記録に必要な項目である、世代の「世」や「受業師」「年号」「嗣法師」「住僧也」のみ記し、後に当該の字を填め込んだ形跡などもみられる。しかし、このように記録上の不備など問題点も多いが、約六百年にわたる總持寺の歴代住持と瑞世師の名簿である。

次に、『住山記』の資料的価値について述べると、まず最初に挙げなければならないのは、膨大な収録僧名と寺院名である。五万一千余を数える輪住者および瑞世者（輪住廃止後）と、その受業師・嗣法師を単純計算すると十五万余になるが、受業師・嗣法師の欠落や重複、さらには同名異人などもあるから、これらを勘案しても十万余から十一万にのぼることは間違いない。また寺院名も観音寺・円通寺など重複があるが、四万六千余にのぼることは確かである。また輪住者の動向、輪住者と受業師・嗣法師の問題、寺院名・門派名・国名（出身地）などから、教団の成立と全国的展開の実情を如実に把握できることである。まず五万一千余の輪住者の動向であるが、時代が下るにしたがい輪住者が増加するとともに、在住期間も当然短期になっている。また永正六年（一五〇九）以降同日輪住^⑧も数多くみられ、なかには師資同日輪住^⑨の例もあるが、十名^⑩以上の場合が二百八十余回におよんでいる。とりわけ注目しなけれ

ばならないのは、嘉永五年（一八五二）八月十五日には、最多の四十七名が同時に輪住しているのみならず、同八月十二日から二十四日までの八日間に、輪住者が二百二十四名^⑪を数えていることである。

次に輪住者の入寺時期については、積雪の時期である十二月・一月は極めて稀で、それ以外は満遍なく行われているが、同日十名以上の場合をみると、三月がもっとも多く、次が八月（開山忌との関係か）・四月・二月の順になっている。なお同日輪住の場合、同門派や同じ地方からの傾向が強く、また輪住者数の極端な増減もみられる。それは開山忌・二代忌など宗内的事情、幕府による總持寺諸法度の発布や、寺社奉行の裁許などによる政治的影響、天明二年（一七八七）の飢饉・疫病など社会経済的動向と多分に相關関係にあることなどもわかる。

また峨山派と相剋した明峰派、陸奥・出羽両国の本寺として輪住に応じなかった月泉派・道叟派、地方教化に専念した玄翁（源翁）派や無着派、さらには永平寺関係の法王（鳳王）派などの輪住にあたっては、五院なかでも無端派・大徹派・実峰派の取次による八十余件の輪住（巻十、四千三百三十二世恕舜和尚〈明峰派〉）巻二十六、九千二百三十六世木因和尚〈源翁派〉や、二百六十余件にのぼる成直再公文による輪住、その他位牌公文、^⑫涅槃号、贈公文、^⑬遙授、褒命転衣などの発給は、瑩山門派間の複雑な動勢や、永平寺派との重層的な関係なども洞察できる。

次に五万余にのぼる輪住者・瑞世者と、その受業師・嗣法師との関係は、その初期には受業師と嗣法師は異なっているが、元禄年間から同一人になる傾向が強く、なかには因院易師の弊風によるものか、嗣法師が同一であるにも拘らず、輪住者の門派が異なる例や、受業師・嗣法師は和尚が普通であるが、文明から永禄にわたり、明応を中心として、稀ではあるが首座・座元・長老・藏主・知客・書記・監寺・都寺などがなっており、現在では計り知れないものもある。しかしいずれにしても師資の關係が明らかになるのみならず、それは本末關係の確立に直結するものでもある。

また四万六千余の寺院名から、現在廢寺になっている寺院や、移転改称している寺院など、その動向を知ることが

できる。

次に輪住者の門派や国名（出身地）についてみると、まず門派は法王（鳳王）派、宇治興聖寺派、加州大乘寺派、酒井永光寺派、黒石派（正法寺派）、伝法庵派、了庵派（通幻派下）などもわずかに散見するが、一見しただけでもわかるように、通幻派が圧倒的に多く約五十%の二万五千余にのぼり、次の太源派の三十%一万四千を加えると、およそ八十%三万九千を占め、教団の実体を把握することができる。また国名（出身地）については、總持寺の所在地能登を中心とする北陸地方は八千余の十六%に過ぎないが、陸奥・出羽など東北地方は極めて多く、一万四千余の三十%を占めていることがわくと同時に、門派と地域性の関係も判明し、前の寺院名とあわせ、教団展開の実態を探ることができる。

また天正十五年（一五八七）以降残存する五院の住山記、わずかに伝承している永平寺瑞世師名簿『永平寺住山記』や「道正庵着帳写」、さらには『延享度曹洞宗寺院本末牒』その他と比較検討することにより、總持寺内における五院輪住との関係、總持寺輪住と永平寺瑞世との関係などが明らかになり、廃寺や移転改称寺院、および火災その他により資料を逸失した寺院も含め、全国にわたる個々の寺院史の解明、あるいはこれによる地方史の見直しや作成などにも資すること大であることは間違いない。

このように『住山記』は總持寺教団の成立および全国的展開、ひいては曹洞宗教団の発展過程を知る上で、不可欠の基礎資料である。またそのみならず日本禅宗史・日本仏教史の研究、さらにはひろく学界に資することは確かである。

（二）『總持寺住山記』の成立

はじめに前項でも触れたように、前表紙裏に「住山比丘宗葩謹誌」とあることから、七十二世春谷宗葩が開山瑩山瑾和尚から七十一世惟忠勤和尚まで書き改めているが、次に『住山記』成立の実情を示す資料Ⅱ記録と補注があるので、これを掲げるが記録は次の通りである。

(1) 卷四首 永祿三庚申調月仲九日伝法菴派之代敬之

(2) 卷五首 諸嶽山總持禪寺住山記江学更改之妙高派之代敬之
天正十年七月廿八日

(3) 卷二十四首 諸嶽山總持禪寺住山記
延寶六戊午天二月朔日
大徹派夏代 維那丹嶺

(4) 卷二十五首 諸嶽山總持禪寺住山記
延寶七己未六月
通幻派冬代 維那門佐

(5) 卷二十六首 諸嶽山總持禪寺住山記
天和二壬戌曆
通幻派夏代 維那文廣

(6) 卷二十七首 諸嶽山總持禪寺住山記
貞享元甲午曆
太源派夏代 維那光峻

(7) 卷二十八首 諸嶽山總持禪寺住山記
貞享三丙寅曆六月五日
実峰派夏代 維那天秀

(8) 卷二十九首 諸嶽山總持禪寺住山記
貞享五戊辰曆四月十四日
大徹派夏代 維那光吉

(9) 卷三十首 諸嶽山總持禪寺

元祿三庚午曆正月吉日

(10) 卷六十二首 諸嶽山總持禪寺住山記

享保十六辛亥年三月穀旦
如意庵夏代 維那松巖寺

(11) 卷九十七首 自寛政二

庚戌

年六月廿日

至同 四

壬子

年閏二月十四日

妙高庵夏代

當維那太清院

(12) 卷百二尾 普藏院夏代維那寮當職

円通院 公文書記役太清院

寛政十一

己未

年四月廿日迄終

諸嶽山新書庫納置焉

次に補注は次の通りである。

(1) 卷三、一千世春壑芳 (天文七年六月二十五日入寺) の次 諸嶽山總持禪寺前住帳第二千世之始

(2) 卷百十九首 先住山記 天保九年之分々拾四ヶ寺誌置

尾 天保十一年ノ分々七十七ヶ寺也

- (3) 卷百二十首 先住山記^三天保十一年ノ分^メ七十七ヶ寺誌^シ置
- (4) 卷百二十二首 今年ノ分先住山記^二 四十八ヶ寺誌^ス
- (5) 卷百二十五首 嘉永四年^多歳之分先住山記^三五十二ヶ寺記
- (6) 卷百二十六首 嘉永五年^子歳之分先住記^三三百六十八ヶ寺記^二内壹本再公文有
- (7) 卷百二十九首 先記百五十五員

このような記録や補注は他の巻にもあつたと思われるが、あるいは保存状態が悪かつたためか、修理の際などに廃棄されたものと思われる。また『住山記』は六百年にわたり記録されているから、前にも述べたように、時代によつて、また公文書記により、記録の方法なども変容している。いま前掲の資料を中心に、『住山記』の成立事情を考えると、五院がしかも夏・冬交代で担当していること、また各五院の維那の統轄のもとで公文書記が記録していること、記録にあたつては『住山記』を通覧することによつてわかるが、輪住者名を記した覚書によつていふこと、かつ補注からわかるように「諸嶽山總持禪寺前住帳」、「先住山記」、「先記」を参考にしていることがわかる。

また時代が下ると五院配下の山内塔頭^⑩が維那・公文書記を勤めている。卷六十二によると享保十六年（一七三二）は、如意庵夏代で維那は松巖寺（伝法庵下）であり、卷百二の寛政十一年（一七九九）は普蔵院夏代で、維那は円通院（妙高庵下）、公文書記は太清院（妙高庵下）であるから、役割を襷掛けであたつてゐる。しかし卷九十七によると、寛政二年（一七九〇）妙高庵夏代で維那は太清院（妙高庵下）であるから、必ずしも襷掛けによる役割分担とは限られてゐなかつたことがわかる。いづれにしても五院が夏・冬交代であたり、維那統轄のもと公文書記が記録し、書庫に納め保管していることがわかる。

なお最後に卷三、千十九世普應哲（天文九年四月八日入寺）の項に「後奈良院編旨賜于此和尚」、同卷千二百八十八

世万休歳(永祿二年十月四日入寺)の項に「方丈造立沈金初也、十月四日壬子^(寅)」とあることを付記したい。

【注記】

- (1) 法名の訂正部分(○印) 三百五世仲翁、四百四十二世大虚徹、四百四十三世高巖柏、四百五十四世師山仁、四百五十八世轉翁麟、四百七十五世寶山登、四百九十五世如心恕、四百九十七世喜叟津、五百四十二世惟笑悦、五百七十三世笑月奕、五百七十五世林英通、三百二十八世^{原若}如菴真。
- (2) 初見は卷四尾一翁勝と卷五首鳳山がともに千七百四十二世、四万五百九十六世天榮の項に付箋「此天榮和尚同年八月十七日之處記有之此分二重也除之可申事」とある。
- (3) 特に著しいものは三万八千八百九世、三万八千八百八十八世、三万八千九百十世、三万八千九百八十九世とともに八十世。
- (4) 初見は千二百五十七世、なお三千百二十二世、三千百三十四世(通幻派) 他
- (5) 永平寺・正法寺などに出世し、改めて總持寺に出世することである。永平寺成直の初見は元和三年(一六一七)十月十日入寺の三千三十八世存忠(筑後光福寺)、正法寺成直の初見は寛永元年(一六二四)七月十五日入寺の三千二百十一世良円(奥州正法寺)
- (6) 大と太、丁と了、怏(懌)と快、與と興、英と莫、鈍と純などである。
- (7) 卷百三十六にある付箋紙に「明治三年七月廿五日輪住制廃止となる 瑞世師世代は継続する」とある。
- (8) 永正六年閏八月二十八日四百五十五世明菴哲と四百五十六世心巖智が入寺している。
- (9) 初見は万治三年(一六六〇)三月十五日、六千六百二十五世是椿と六千六百二十六世伝越(嗣法師是椿)
- (10) 初見は天正十八年(一五九〇)六月九日、千九百七十三世鷄雲源、千九百八十二世芳伝ですべて通幻派である。
- (11) 八月十二日十五名、十三日十名、十四日二十三名、十五日四十七名、十八日三十三名、十九日七名、二十日三十一名

二十一日十七名、二十二日十三名、二十三日十三名、二十四日十五名

(12) 六千二百六十世南宗（加賀天窓院）は明暦三年（一六五七）正月一日入寺している。

(13) 初見は寛永二年（一六二五）四月四日、三千二百六十二世龍從（金鐘寺 薩州）

(14) 初見は寛永十年六月八日、四千六十三世葉室孫（華岳院 豆州）

(15) 初見は明治十三年（一八八〇）八月二十八日、五万九百三十七世徳昌（箱岩寺 越後）

(16) 初見は明治十四年三月二十七日、五万六千六百五十五世雄鉄（信州）

(17) 初見は明治十七年六月一日、五万五千八百八十二世惟裕（永寿院山内〈能登〉）

(18) 初見は享保六年（一七二二）三月九日輪住した一万六千六百六十一世大拙と、一万六千六百六十二世葉仙の嗣法師はともに石鷲であるが、前者は太源派で後者は大徹派である。

(19) 普蔵院 興・禪・寺・正覚寺・正福寺・長泉寺（四ヶ寺）

妙高庵 芳・春・院・玉泉院・昌寿寺・雲谷寺・円通院・太清院・宝幢寺（七ヶ寺）

洞川庵 慶福寺・東源寺・昌泉寺・秀翁寺（四ヶ寺）

伝法庵 覺皇院・千寧寺・永福寺・松岩寺（四ヶ寺）

如意庵 瑞雲寺・青陽軒・永寿院（三ヶ寺）

（・印は現存塔頭）

(三) 『洞川庵住番記』『洞川庵輪住誌』とその問題点

洞川庵は無端祖環（？）（一三八七）を開基とする總持寺山内の塔頭であるが、その輪住帳は折本装の二冊からな

り、第一冊の『洞川庵住番記』は縦三四・二糎、横二〇・〇糎で元和四年（一六一八）から天保三年（一八三二）まで、二百十五年間の記録であり、第二冊の『洞川庵輪住誌』は縦三四・五糎、横一九・二糎で、天保四年（一八三三）から明治三年（一八六九）まで、三十七年間の記録である。両者は年代的に欠落なく継続しているにも拘わらず、表題も異なり、表記法も違い、門派名についても、第一冊は初期には記録がなく、享保二年（一七一七）以降、いくつか未記入の年もあるが原則としてあり、第二冊はすべて記入されている。これらのことを考えると、あるいは本来異った二種の輪住帳があったものかも知れない。

まず最初に『洞川庵住番記』と『洞川庵輪住誌』を翻刻し、それに対応する『總持寺住山記』を揭示し、その実情と問題点について考察する。

洞川庵住番記——前表紙（直第卅四號 住番記）

（卷首）當庵住持職開基滅後以來門葉巡次

見席年深矣尋其權輿於何歲何州

請招何寺院傳記絕乎往昔不可見

蓋按遭世之喪亂或爲放火亡乎不知將^{（爭）}

爲災火失耶今之所錄者興州正法寺芳

朔和尚繼彼墜緒中興之實自慶長十五

庚戌仲秋至翌申亥仲秋而後七八年

復闕如山時四方尚猶未靜一派院門

多爲頽廢雖有招命無力荷負是以

姑塔頭某等互侍灑掃之役更奉

香火之勤至元和初四海全復於是

請狀無滯進退惟順彼月泉道叟

之二派振古勤力負任者復如故終綿

歷識註至如今某州何寺院同諱字備

戴記乎左古史久而文字不易見今茲

某甲改紙繕寫具乎後鑑尚不朽

豈享保三歲次戊仲秋

現昌泉住僧晚學康觀誌

總持寺住山記

總持寺五院の成立と展開 (三)

從元和四戊午年八月 到同五年	羽州庄内梵照寺〔星室〕廣集和尚
從元和五己未年八月 到同六年	常州元戸龍穩院〔宏會〕源益和尚 <small>奕</small>
從元和六庚申年八月 到同七年	羽州酒田海安寺〔笑岩〕祖闇和尚
從元和七辛酉年無端派 到同八年	石州龍雲寺〔財庵〕周珍和尚
從元和壬戌年 到同九年	下総州宗徳寺〔額峰〕総帛和尚
從元和癸亥年 到寛永元年	能州靈泉寺〔湛應〕守存和尚
從寛永元年甲子年 補陀寺代住 到同二年	出羽秋田觀喜寺 <small>代林可勤</small>
從寛永二乙丑年 到同三年	能州靈泉寺〔湛應〕守存和尚
從寛永三丙子年 到同四年	羽州岩屋永傳寺 <small>闇達和尚</small>
從寛永四丁卯年 到同五年	能州靈泉寺〔胆顔〕惠察和尚

無端派 永平寺成直
三千四十九世星室廣集和尚 受号源瑞和尚 元和四年 九月廿日
梵照寺 嗣法慶察和尚 出羽ノ秋田人事

(該当なし)

無底派
三百世笑巖宗闇和尚 嗣法高岩祖天和尚 元和七 西辛
海安寺 受業同人 八月十二日入寺

無端派 永平寺成直
三百四十二世財庵周珍禾 嗣法殊權和尚 元和八年延八月十日
龍雲院 受業賢受和尚 生國石州人事

(該当なし)

(該当なし)

(該当なし)

(該当なし)

無端派
三千三百六十世闇達和尚 受号師玄達和尚 生國奥州住人事
永傳寺 嗣法師淳越和尚 寛永三 丙子霜月廿四日

無端派
三千三百八十世惠察和尚 嗣法師守道和尚 生國能州□□
灵(靈)泉寺 受号師直道和尚 寛永四年 丁卯五月十六日

從寛永五戊辰年
到同六年

羽州仙北永泉寺〔通室〕受達和尚

從寛永六己巳年
到同七年

能州靈泉寺〔胆顔〕惠察和尚

從寛永七庚午年
到同八年

羽州米澤東照寺〔了室〕^{〔正〕}隣學和尚^{〔林〕}

從寛永八辛未年
到同九年

奥州仙臺天雄寺珉達和尚

從寛永九壬申年
到同十年

奥州伊澤永徳寺〔放山〕天膺和尚

從寛永十癸酉年
到同十一年

奥州南部瑞興寺〔陽山〕天朔和尚

從寛永十一甲戌年
到同十二年

羽州酒田地持院千宿和尚^{〔マツ〕}

從寛永十二乙亥年
補陀寺代住
到同十三年

羽州野代長慶寺吞佐和尚

從寛永十三丙子年
到同十四年

能州靈泉寺正幡和尚

從寛永十四丁丑年
到同十五年

奥州南部東顯寺〔崇獄〕善壽和尚

〔該当なし〕

無端派
三千三百八十世或惠察和尚
嗣法師守道和尚 生國能州□□
受号師直道和尚 寛永四年丁卯
五月十八日

無端門中月泉派
三千七百七十二世隣學和尚
授号師隣察和尚 羽州長井
東照寺 嗣法師元の和尚 寛永七
九月廿日

〔該当なし〕

〔該当なし〕

無端派
三千八百二十八世天樂和尚
受業師祖天和尚 奥州之住人
瑞興寺 嗣法師右同 寛永八年
五月三日

〔該当なし〕

〔該当なし〕

〔該当なし〕

無端派
三千七百四十一世善壽和尚
受号師天越 同南部
五月廿八日
東顯寺 嗣法師怨越

總持寺五院の成立と展開（三）

從寛永十五戊子年 到同十六年	關住昌泉林茂御影者持	（該当なし）
從寛永十六己卯年 到同十七年	關住東源寺春碩御影者持	（該当なし）
從寛永十七庚辰年 到同十八年	羽州米澤瑞巖寺「斧叟」大咄和尚 <small>（融）</small>	無端派 四千九百九世大鎚和尚 瑞岩寺 授業師是訓和尚 出羽長井人事 副法師貞縁和尚 寛永十美十月廿一日
從寛永十八辛巳年 到同十九年	下總栗原寶成寺「名洲」大譽和尚	（該当なし）
從寛永十九壬午年 到同二十年	常州元戸龍穩院「正眼」雲祝和尚	（該当なし）
從寛永二十癸未年 到正保元年	關住昌泉寺林茂御影者持	（該当なし）
從正保元年甲申年 到同二年	關住東源寺春碩御影者持	（該当なし）
從正保二乙酉年 到同三年	關住御影者昌泉寺林茂	（該当なし）
從正保三丙戌年 到同四年	關住御影者東源寺春碩	（該当なし）
從正保四丁亥年 到慶安元年	關住御影者昌泉寺林茂	（該当なし）

從慶安元戊子年
到同二年

羽州油利永泉寺〔端室〕本庄 芳的和尚

從慶安二己丑年
到同三年

道夏派
羽州庄内建龍寺全皆和尚（見）

從慶安三庚寅年
到同四年

月泉開山
羽州秋田補陀寺〔月堂〕運渚和尚

從慶安四辛卯年
到承應元年

闕住御影者東源寺春昨（朔）

從承應元壬辰年
到同二年

闕住御影者昌泉寺林茂

從承應二癸巳年
到同三年

闕住御影者東源寺春昨（朔）

從承應三甲午年
到明曆元年

羽州庄内總光寺〔南室〕雄薰和尚

從明曆元乙未年
到同二年

闕住御影者昌泉寺林茂

從明曆二丙申年
到同三年

無端派
石州三隅龍雲寺元仙和尚

從明曆三丁酉年
到萬治元年

六郷
羽州仙北永泉寺壽源和尚

（該当なし）

無端派
五千三百卅七世全皆和尚
建龍寺
受号師嶺叡和尚 出羽之
慶安三丁酉八月十三日
嗣法師同和尚 住僧也

（該当なし）

（該当なし）

（該当なし）

（該当なし）

無端派
五千四百五十六世雄薰和尚
全雄寺
受号師儀宗和尚 出羽之
慶安四辛卯年五月五日
嗣法師東作和尚 住僧也

（該当なし）

無端派
四千九百廿世元仙和尚
龍雲寺
受号師周珍和尚 石州
正保二丙戌年十月十二日
嗣法師同和尚 之住人

無端派
四千九百六十六世壽源和尚
永泉寺
受号師受達和尚 出羽秋田之
正保四丁亥年四月念四日
嗣法師同和尚 住僧也

總持寺五院の成立と展開（三）

從萬治元戊戌年 到同二年	關住御影者秀翁院春碩	（該当なし）
從萬治二己亥年 到同三年	關住御影者昌泉寺堅康	（該当なし）
從萬治三庚子年 到同四年	關住御影者東源寺舜昨 ^{（春朔）}	（該当なし）
從寛文元辛丑年 到同二年	關住御影者慶徳寺林茂	（該当なし）
從寛文二壬寅年 到同三年	關住御影者秀翁院春碩	（該当なし）
從寛文三癸卯年 到同四年	關住御影者昌泉寺堅康	（該当なし）
從寛文四甲辰年 到同五年	羽州酒田海安寺 ^{（晏）} 壽積和尚	（該当なし）
從寛文五乙巳年 到同六年	關住御影者東源寺春碩 ^{（朔）}	（該当なし）
從寛文六丙午年 到同七年	關住御影者慶徳寺林茂	（該当なし）
從寛文七丁未年 到同八年	陸奥三春龍穩寺「月宮」恵満	（該当なし）

從寛文八戊申年
到同九年

陸奥伊澤永徳寺〔飲國〕長藝^(鯨)

^(貼付紙「元和四」一「度目」)
從寛文九乙酉年
到同十年

羽州庄内梵照寺白雄和尚

^(貼付紙「始テ」)
從寛文十戊戌年
到同十一年

陸奥仙臺梅溪寺〔儀翁〕恩祝和尚^正

從寛文十一辛亥年
到同十二年

陸奥南部東顯寺〔寶山〕全國和尚

從寛文十二壬子年
到同十三年^{月泉開闢}

出羽秋田補陀寺〔日暮〕鷺遵和尚

從延寶元癸丑年
到同二年

出羽酒田地持院恕薫和尚^(ママ)

從延寶二甲寅年
到同三年

陸奥仙臺願成寺〔徳巖〕圓重和尚

從延寶三乙卯年
到同四年

石州三隅龍雲寺〔孤峰〕不白和尚

從延寶四丙辰年
到同五年

^{道復派}
羽州庄内乾龍寺〔海嶽〕普禪和尚^(見)

從延寶五丁巳年
到同六年

關住御影者秀翁院存龍

〔該当なし〕

無端派
七千四百七十六世白雄和尚
梵照寺
受号師義歎和尚 羽州
寛文七丁未歲四月七日
嗣法師玄逸和尚 住僧

無端派
七千五百七十世恩祝和尚
松盛院
受号師宗恩和尚 奥州之
寛文八戊申五月三日
嗣法師麟藝和尚 住僧也

無端派
六千九百四十四世全國和尚
東顯寺
受業師門鷹和尚 南部之
寛文三癸卯天三月十五日
嗣法師同和尚 住僧也

〔該当なし〕

〔該当なし〕

〔該当なし〕

無端派
六千貳百四十三世不白和尚
洞明寺
受号師周珍和尚 石州之
明暦貳年丙申八月廿四日
嗣法師元仙和尚 住僧也

〔該当なし〕

〔該当なし〕

總持寺五院の成立と展開（三）

從延宝六戊午年 到同七年	出羽 ^{本庄} 由利永泉寺玄龍和尚
從延寶七己未年 到同八年	下総州臼井宗徳寺靈峰〔円芝〕和尚
從延宝八庚申年 到同九年	羽州仙北六郷永泉寺〔徳巖〕祖三和尚
從天和元辛酉年 到同二年	能州靈泉寺海禪和尚
從天和二壬戌年 到同三年	羽州松山總光寺〔來國〕 ^{（撮）} 尊察和尚
從天和三癸亥年 到同四年	上總米原大通寺〔乾嶺〕梁宅和尚
從貞享元甲子年 到同二年	關住御影者昌泉寺堅康
從貞享二乙丑年 到同三年	奥州南部昌歡寺〔斧峰〕光鋤和尚
從貞享三丙寅年 到同四年	出羽酒田海晏寺玄要〔用津〕和尚
從貞享四丁卯年 到同五年	關住御影者東源寺柏榮

無端派 七千四百八十五世玄龍和尚 正壽寺	受号師玄益和尚 羽州之 寛文七丁未歲四月十七日 嗣法師音越和尚 住僧□
（該当なし）	
無端派 七千五百八十四世祖三和尚 永泉寺	受号師秀存和尚 羽州之 寛文八戊申曆五月十三日 嗣法師壽達和尚 住僧也
無端派 九千百五十三世海禪和尚 靈泉寺	受業師巡浦和尚 能州之 延寶九辛酉曆八月九日 嗣法師卓心和尚 住僧也
（該当なし）	
（該当なし）	
（該当なし）	
無端派 九千百三十六世玄要和尚 梅林寺	受業師壽積和尚 羽州之 延宝九辛酉曆卯月廿日 嗣法師尊龍和尚 住僧也
（該当なし）	

從元禄元戊辰年
到同二年

關住御影者慶徳寺白元

(該当なし)

從元禄二己巳年
到同三年

關住御影者秀翁院存龍

(該当なし)

從元禄三庚午年
到同四年

陸奥州三春龍穩院麟之「雲祥」和尚

(該当なし)

從元禄四辛未年
到同五年

陸奥膽澤永徳寺「龍谷」宅盤和尚

無端派
受身師傳鶴和尚 奥州之
七千三百三十九世宅盤和尚
寛文六丙午歲三月十三日
嗣法師傳鶴和尚 住僧也
瑞徳寺

從元禄五壬申年
到同六年

關住御影者昌泉寺堅康

(該当なし)

從元禄六癸酉年
到同七年

羽州庄内梵照寺義山「關深」

無端派
九千二百十五世関深和尚
受業師関鐵和尚 羽州之
天和二戊辰卯月廿日
嗣法師元逸和尚 住僧也
梵照寺

從元禄七甲戌年
到同八年

奥州南部瑞雲寺東谷和尚

(該当なし)

從元禄八乙亥年
月泉開闢
到同九年

羽州秋田補陀寺孤峯良本和尚^(秀)

(該当なし)

從元禄九丙子年
到同十年

羽州米澤東照寺佛眼「快與」和尚^(正)

(該当なし)

從元禄十丁丑年
到同十一年

奥州横山大徳寺天柱和尚

(該当なし)

總持寺五院の成立と展開（三）

從元禄十一 年到同十二	慶徳寺雲越 秀翁院存龍 昌泉寺康觀 東源寺柏栄	關住門中輪次
從元禄十二己卯年 到同十三年		能州芳春院鳳山「恵丹」和尚
從元禄十三庚辰年 到同十四年	道復派	羽州庄内見龍寺心嶺「丑月」和尚
從元禄十四辛巳年 到同十五年		羽州本庄永泉寺禪鑑「智伯」和尚
從元禄十五壬午年 到同十六年		羽州仙北永泉寺蘭洲「瑞堂」和尚
從元禄十六未年 到宝永元年		羽州酒田泉流寺通菴「巴」和尚
從寶永元年申 年到同二年		奥州南部瑞興寺覺苗「元真」和尚
從寶永二酉年 到同三年		羽州酒田地持院要天和尚
從寶永三戌年 到同四年		羽州米澤瑞岩寺「鳳山」雪牛和尚
從寶永四亥年 到同五年		石州三隅龍雲寺圓山「周達」和尚

（該当なし）	無端派 一万二千四百七世蘭洲和尚 永泉寺	受業師碩端和尚 羽州之 元禄十五午曆八月十日 嗣法師義薰和尚 住僧也
（該当なし）	（該当なし）	
（該当なし）	（該当なし）	
（該当なし）	（該当なし）	
（該当なし）	（該当なし）	
（該当なし）	無端派 一万三千三百廿九世圓山和尚 龍雲寺	受業師達三和尚 石州之 寶永四丁亥歳八月二日 嗣法師雪山和尚 住僧也
（該当なし）	月泉派 一万三千七十二世雪牛和尚 瑞岩寺	受業師養天和和尚 羽州之 元禄十四辛巳曆三月朔日 嗣法師養天和和尚 住僧也

從寶永五子
到同六年

羽州松山総光寺綴庵〔宗甫〕和尚

從寶永六丑
到同七年

奥州梅溪寺觀堂〔頓察〕和尚

從寶永七寅
到同八年

關住門中
東源寺實門
慶徳寺龍淵
秀翁院存應
昌泉寺康觀

從正徳元卯
到同二年

下総州寶成寺嵩山〔智燈〕和尚
（崇）

從正徳二年
到同三年

本州靈泉寺壽門〔領鶴〕和尚

從正徳三己
到同四年

羽州酒田海安寺金山〔雷峰〕和尚
（晏）

從正徳四甲午
到五年

奥州南部正音寺〔眺雲〕鑑能和尚

從正徳五未
到享保元年

陸奥州永徳寺無垢〔宣明〕和尚

從享保元年
到同二年

奥州三春龍穩院高山〔本立〕和尚

從享保二酉
至同三年
月泉開闢

出羽州秋田補陀寺正田千英和尚

（該当なし）

（該当なし）

（該当なし）

道叟派
一万四千四十七世嵩山和尚
再公文
受業師蘆洲和尚
正徳元年辛卯八月初六日
下総之
祠法師實泉和尚 住僧也

無端派
一万二千九百九十五世領鶴和尚
受業師玉嶺和尚 能州之
元禄十三庚辰曆八月十日
祠法師顔察和尚 住僧也

道叟派
一万二千四百五十一世雷峯和尚
受業師龍順和尚 羽州之
元禄十五壬午曆閏八月十一日
祠法師光室和尚 住僧也

無端派
一万三千二百八十六世鑑能和尚
受業師龍盤和尚 奥州之
寶永四丁亥歲五月三日
祠法師萬永和和尚 住僧也

（該当なし）

（該当なし）

（該当なし）

總持寺五院の成立と展開 (三)

從享保三戌年
至同四年

當山芳春〔院遷倫〕萬喬和尚

從享保四年亥
至同五年子八月

正正只シ直請狀陸奥仙臺願成〔寺〕芝巖
正正法寺末寺月泉派梅榮開山

從享保五庚子年
道叟派
至同六年辛丑八月

羽州床内見龍寺大雲〔法水〕和尚

從享保六辛丑年
道叟派
至同七年壬寅八月

下総白井宗徳寺仙山〔黙要〕和尚

從享保七壬寅年
無端派
至同八年卯年

奥州仙臺大徳寺歩山和尚

從享保八年卯秋
道叟派
至同九年甲辰年

出羽州米澤東照寺道瑞〔鳳樹〕和尚

從享保九年辰秋
至同十年乙巳年

奥州南部東顯寺大俊〔呑龍〕和尚□〔落款以下同じ〕

從享保十年巳秋
至同十一丙午歳

羽州本庄永泉寺龍睡泰門和尚□

從享保十一丙午秋
至同十二丁未年

羽州仙北永泉寺了之〔純解〕和尚

從享保十二丁未年
月泉派
至同十三戊申秋

上總米原大通寺海盤安東和尚*〔※署名上にある落款は当該の位置に*印以下同じ〕

〔該当なし〕

〔該当なし〕

〔該当なし〕

無端派再公文
一万六千二百三十三世仙山和尚
宗徳寺

受業師義周和尚 下総州之
享保六辛丑年八月九日
嗣法師義禪和尚 住僧也

〔該当なし〕

道叟派
一万六千五百三十七世道瑞和尚
再公文東照寺

受業師尊雪和尚 羽州之
享保八癸卯歳八月五日
嗣法師密山和尚 住僧也

〔該当なし〕

無端派
一万六千八百九十四世龍睡和尚
再公文 永泉寺

受業師芳浮和尚 羽州之
享保十二丁巳年八月九日
嗣法師亀外和尚 住僧也

〔該当なし〕

無端派再公文
一万七千二百七十七世海盤和尚
大通寺

受業師空山和尚 上総之
享保十二丁未年八月九日
嗣法師石風和尚 住僧也

從享保十三戊申
無端派
至同十四己酉秋

從享保十四己酉
月泉派
至同十五庚戌秋

從享保十五庚戌
道叟派
至今十六辛亥秋

從享保十六辛亥
月泉派
至同十七壬子

從享保十七壬子年
道叟派
至同十八癸丑秋

從享保十八癸丑年
道叟派
至同十九甲寅秋

從享保十九甲寅年
月泉派
至同二十乙卯秋

從享保二十乙卯年
月泉派
至同元文元丙辰秋

從元文元丙辰秋
道叟派
至同丁巳年秋

從元文丁巳秋
月泉派
至同三戊午秋

石州三隅龍雲寺古寶〔智瑤〕和尚*

奧州仙臺大慈寺光明〔二明〕和尚*

羽州庄内梵照寺〔頂山〕義門和尚*

羽州米澤瑞岩寺玉鳳〔廣關〕和尚*

羽州莊内總光寺〔一相〕儀圓和尚*

羽州莊内酒田持地院〔覺圓〕宗元和尚*

奧州南部太田昌歆寺徹堂〔寬洪〕□

羽州秋田補陀寺〔棟州〕大梁和尚*

羽州酒田泉流寺秀山〔恵日〕和尚*

奧州三春龍穩院〔泰山〕活玄和尚*

無端派
再公文
一万七千四百七十五世古害和尚
受業師石峯和尚
享保十三戊申年八月八日
嗣法師正山和尚
住僧也

月泉派
再公文
一万七千六百廿五世光明和尚
受業師國顯和尚
享保十四己酉年八月八日
嗣法師悟融和尚
住僧也

無端派
梵照寺
一万六千九十七世義門和尚
受業師閻深和尚
享保五年四月晦日
嗣法師雷峰和尚
住僧也

〔該当なし〕

〔該当なし〕

無端派
一万六千三百六十世宗元和尚
受業師徹嚴和尚
享保七壬寅年五月廿一日
嗣法師丈水和尚
住僧也

月泉派
昌歆寺
一万七千七百四十六世徹堂和尚
受業師本光和尚
享保十五庚戌年四月十日
嗣法師大融和尚
住僧也

月泉派
長福寺
一万七千六百九十九世大梁和尚
受業師正田和尚
享保十二丁未年三月廿九日
嗣法師通外和尚
住僧也

道叟派
梅林寺
一万七千十三世秀山和尚
受業師雷峰和尚
享保十一丙午年四月十六日
嗣法師重玄和尚
住僧也

月泉派
再公文龍穩院
一万九千二百六十八世活玄和尚
受業師梅峰和尚
元文丁巳年八月十三日
嗣法師良愷和尚
住僧也

總持寺五院の成立と展開 (三)

道叟派本寺
從元文三戊午秋
到同四己未秋

月泉開闢
從元文四己未秋
到同五庚申秋

從元文五庚申
道叟派
到寬保元辛酉

從寬保元辛酉
到同二年壬戌

從寬保二壬戌
到同三年癸亥

(貼付紙)
「從寬保三癸亥年
到延享元甲子年」

(貼付紙)
「南部領十年目當
寅卯年」

從延享元甲子年
道叟派
到同二乙丑年

從延享二乙丑年
道叟派
到同三丙寅年

從延享三丙寅年
到同四丁卯年

奥州仙臺永徳寺学海〔禪參〕和尚

奥州仙臺大祥寺不昧〔自鏡〕
正

羽州酒田海晏寺大雪〔玉峰〕

本願派
本州山田洞雲寺〔洲山〕頑鳳補住

下總栗原寶成寺〔玉巖〕元粹□

能州靈泉寺〔心月〕大圓和尚

奥州南部瑞雲寺見牛〔和尚なし〕

羽州莊内見龍寺〔本覺〕観明〔和尚なし〕

下總白井宗徳寺天柱〔見龍〕〔花押〕

(該当なし)

月泉派
一萬八千二百六十二世不昧和尚
長禪寺
受業師大嶺和尚 奥州之
享保十八癸丑年四月廿二日
嗣法師海琳和尚 住僧也

道叟派
二万百二十一世玉峯和尚
再公文海晏寺
受業師慈船和尚 羽州之
元文五庚申年八月八日
嗣法師慈船和尚 住僧也

(該当なし)

道叟派
二万五百七十八世元粹和尚
再公文寶成寺
受業師白元和和尚 下總之
寛保二壬戌年八月十二日
嗣法師春貞和尚 住僧也

無端派
一萬九千九百七十九世大圓和尚
安國寺
受業師梅閑和尚 能州之
元文五庚申年三月十七日
嗣法師瑞應和尚 住僧也

道叟派
二万五千五十九世見牛和尚
再公文瑞雲寺
受業師泉龍和尚 奥州之
延享元甲子年八月十二日
嗣法師松音和尚 住僧也

無端派
二萬二百六十四世観明和尚
延命寺
受業師大容和尚 羽州之
寛保元辛酉年三月廿四日
嗣法師大容和尚 住僧也

無端派再公文
二万四千四百八十四世天柱和尚
宗徳寺
受業師本始和尚 下總之
延享三丙寅年八月九日
嗣法師利見和尚 住僧也

從延享四丁卯年
無端派
到同五戊辰秋

從寬延元戊辰年
無端派
到同己巳仲秋

從寬延己巳年
月泉派
到同庚午仲秋

從寬延三庚午年
月泉派
到同四辛未仲秋

從寶曆元辛未年
道叟派
到同壬申中秋

從寶曆二壬申年
道叟派
到同三癸酉中秋

從寶曆三癸酉年
到同四甲戌年

從寶曆四甲戌年
月泉派
到同乙亥仲秋

從寶曆五乙亥年
無底派
到丙子仲秋望日

從寶曆六丙子年
道叟派
到同七丁丑仲秋

陸奥州仙臺大徳寺仙丈（和尚なし）

石見州三隅龍雲寺「空谷」契心（花押）
（恕）

奥州仙臺寶鏡寺「定天」何必（花押）
正

羽州秋田補陀寺「應先」觀性（花押）

羽州本莊永泉寺道憐「智探」（花押）

羽州米澤東照寺「骨龍」自換（花押）
（正）

太源派
加州金澤月照寺覃山「良補」補住
（潭）

奥州南部花巻瑞興寺「魚參」隣道（花押）

武州秩父廣見寺雲蓋「英方」□
直講疏

羽州莊内松山總光寺「富翁」壽山
＊

無端派
一萬七千八百八十七世仙丈和尚
大徳寺
受業師天柱和尚 奥州之
享保十二壬午年二月念日
嗣法師天海和尚 住僧也

無端派再公文
二萬千八百五十八世契心和尚
龍雲寺
受業師大仙和尚 石州之
寛延元戊戌年八月九日
嗣法師大仙和尚 住僧也

月泉派再公文
二萬二千八十七世何必和尚
寶鏡寺
受業師環湖和尚 奥州之
寛延己巳年八月九日
嗣法師環湖和尚 住僧也

月泉派
一萬七千五百九十八世應先和尚
永源寺
受業師即應和尚 羽州之
享保十四己酉年四月廿九日
嗣法師觀月和尚 住僧也

道叟派
一萬六千九百五十世智探和尚
東林寺
受業師日台和尚 羽州之
享保十一丙午年三月十三日
嗣法師養親和尚 住僧也

道叟派
一萬八千八百七十世自喚和尚
東照寺
受業師鳳樹和尚 羽州之
享保廿一丙辰年二月廿二日
嗣法師鳳樹和尚 住僧也

（該当なし）

無端派
一萬九千五百十一世隣道和尚
瑞興寺
受業師大全和尚 陸奥之
元文三戊午年二月廿二日
嗣法師大酬和尚 住僧也

（該当なし）

（該当なし）

總持寺五院の成立と展開 (三)

從宝曆七丁丑年
到同八戊寅仲秋

羽州莊内梵照寺「千峰」如日〔花押〕

從寶曆八戊寅年
到同九己卯中秋

奥州三春龍穩院亮廓〔普示〕□

從宝曆九己卯
到同十庚辰中秋

月泉派
陸奥仙臺梅溪寺「二之」環如□
正

從寶曆十庚辰
到同十一辛巳秋

月泉派
羽州米澤瑞巖寺機峯〔海關〕〔花押〕
直請

從寶曆十一辛巳秋
到同十二壬午秋

道叟派
下總栗原寶成寺戒舟〔亮浮〕〔花押〕

寶曆十二壬午秋進山
同十三癸未秋退院

道叟派本寺
陸奥仙臺永德寺楚山〔慧白〕□

從寶曆十三癸未秋
到明和元年甲申秋

道叟派
羽州秋田六郷永泉寺方圓〔良廣〕〔花押〕

從明和元年申槐
到同二年乙酉秋

奥州南部正音寺佛超〔惠忍〕□

從明和二乙酉
到翌丙戌中秋

月泉開闢
出羽秋田補陀寺德善〔民道〕〔花押〕
*

從明和三戊
到同翌亥秋

月泉派補闕
出羽由利本庄藏堅寺鳳髓〔徹翁〕□

無端派
二萬二千七十一世千峰和尚

普洞院

受業師太夢和尚 羽州之
寛延二己巳年五月廿日
嗣法師太夢和尚 住僧也

月泉派再公文
二萬三千九百十九世亮廓和尚

龍穩院

受業師梅翁和尚 奥州之
寶曆八戊寅年八月七日
嗣法師鐵崖和尚 住僧也

月泉派
二萬四千五百十四世環如和尚

真法寺

受業師佐禪和尚 奥州之
延享二乙丑年三月廿三日
嗣法師海翁和尚 住僧也

無端派再公文
二萬四千四百廿五世機峯和尚

瑞岩寺

受業師東州和尚 羽州之
寶曆十庚辰年八月九日
嗣法師唯山和尚 住僧也

道叟派再公文
二萬四千五百九十九世戒舟和尚

寶成寺

受業師天順和尚 下總之
寶曆十一辛巳年八月八日
嗣法師天順和尚 住僧也

〔該当なし〕

月泉派
二萬四千五百五十九世方圓和尚

永泉寺

受業師了之和尚 羽州之
寶曆九己卯年五月十八日
嗣法師大易和尚 住僧也

月泉派
二萬五千二百七十九世佛超和尚

再公文正音寺

受業師天印和尚 奥州之
明和元年甲申年八月五日
嗣法師義詮和尚 住僧也

月泉派
二萬五千五百九十世德善和尚

大龍寺

受業師常轉和尚 羽州之
寶曆二壬申年四月八日
嗣法師常轉和尚 住僧也

月泉派
二萬五千七百四十三世徹翁和尚

再公文 藏堅寺

受業師桂岩和尚 羽州之
明和三戊年八月七日
嗣法師寂岩和尚 住僧也

從明和四亥
到子ノ中秋

道叟派
出羽庄内酒田持地院〔延領〕大仙〔花押〕

從明和五子
到丑ノ中秋

下總州千葉宗胤寺〔章巖〕賢豐□

從明和六丑
到寅中秋

正法寺本月泉派傳宗開山
陸奥仙臺願成寺石室〔橋堂〕

從明和七寅
到辛卯中秋

無端開闢
石州三隅龍雲寺鎮州〔本圭〕

從明和八卯年
到壬辰中秋

道叟派
羽州庄内見龍寺〔覺全〕泰教□

從安永元壬辰年
到癸巳中秋

奥州仙臺大德寺祖目和尚□

從安永二癸巳年
到甲午中秋

直請疏
羽州庄内泉流寺〔千山〕藏峯□
道叟派

從安永三甲午年
到乙未中秋

直請疏
奥州南部東顯寺〔祖海〕震龍□
道叟派

從安永四乙未秋
至丙申之秋

羽州本莊永泉寺〔興國〕寬豐〔花押〕

從安永五丙申年
到同六丁酉之秋

直請疏
上總米原大通寺大安〔元亮〕和尚〔花押〕

〔該当なし〕

道叟派
二万六千五百五十八世賢豐和尚
再公文 宗胤寺

受業師秀實和尚 下総之
明和五戊子年八月九日
嗣法師秀實和尚 住僧也

〔該当なし〕

無端派
二万六千五百五十九世鎮州和尚
再公文 龍雲寺

受業師文山和尚 石州之
明和七庚寅年八月八日
嗣法師白龍和尚 住僧也

〔該当なし〕

無端派
二万四千五十七世祖目和尚
保寿寺

受業師運明和尚 奥州之
寶曆九己卯年三月廿二日
嗣法師運明和尚 住僧也

〔該当なし〕

道叟派
二万四千六百七十世祖海和尚
新井寺

受業師單禪和尚 下総之
寶曆十二壬午年三月六日
嗣法師越宗和尚 住僧也

〔該当なし〕

月泉派
二万七千七百五世大安和尚
再公文 大通寺

受業師天海和尚 總州之
安永五丙申年八月十一日
嗣法師天海和尚 住僧也

總持寺五院の成立と展開 (三)

從安永六酉年
道叟派
到同七戌戌秋

從安永七戌年
道叟派
到同八亥秋

從安永八亥年
月泉派
到同九庚子秋

從安永九庚子年
無底派
到天明元辛丑秋

從天明元辛丑年
月泉開闢
到同二壬寅秋

從天明二壬寅歲
到同三癸卯秋

從天明三癸卯年
月泉開闢
到同四甲辰中秋

從天明四甲辰年
道叟派
到同五乙未中秋

從天明五乙巳年
到同六丙午年

天明六丙午年
進菴
同七丁未八月退院

出羽庄内海晏寺海門〔實山〕(花押)

出羽庄内總光寺層雲〔洞龍〕
□□

直請疏
奥州仙臺大慈寺孤峯〔仙巖〕
正□□

武州秩父廣見寺〔天隆〕壽門○(※落款以下同じ)

羽州秋田補陀寺實參(花押)

山内覺皇院徳岩補住(花押)

奥州三春龍穩院萬元〔一如〕(花押)

羽州庄内梵照寺〔大庵〕慧覺(花押)

奥州南部昌歆寺徹宗〔探玄〕□

道叟派本寺
奥州仙臺永徳寺〔大忍〕楚寶□

月泉派
二万三千九百十一世實山和尚
滿福寺

受業師雪重和尚 羽州之
寶曆八戌寅年七月十五日
嗣法師雪重和尚 住僧也

道叟派
二萬五千九百七十五世洞龍和尚
圓應寺

受業師潜龍和尚 羽州之
明和四丁亥年八月十八日
嗣法師慈船和尚 住僧也

(該当なし)

無底派
二万三千九百七十三世壽門和尚
慈眼寺

受業師雲蓋和尚 武州之
寶曆三癸酉年八月十一日
嗣法師英器和尚 住僧也

(該当なし)

(該当なし)

月泉派
二万八千九百世萬元和尚
再公文龍穩院

受業師亮廓和尚 奥州之
天明三癸卯年八月十四日
嗣法師亮廓和尚 住僧也

道叟派
二万八千九百七十八世慧覺和尚
再公文梵照寺

受業師祖海和尚 羽州之
天明四甲辰年八月八日
嗣法師祖海和尚 住僧也

月泉派
二万六千五百二十三世徹宗和尚
寶泉寺

受業師本宗和尚 羽州之
明和七庚寅年五月十二日
嗣法師本宗和尚 住僧也

道叟派
二万六千二百六十二世楚寶和尚
常樂寺

受業師楚山和尚 奥州之
明和六己丑年四月五日
嗣法師楚山和尚 住僧也

從天明七末年
道叟派
同八申八月退院

從天明八申年
月泉派
同寛政元酉八月退院

從寛政元酉年
道叟開闢
到同二戌八月退院

從寛政二戌年
月泉開闢
到同三亥八月退院

從寛政三辛亥年
到同四壬子中秋

從寛政四壬子年
道叟派
到同五癸丑仲秋

從寛政五癸丑年
道叟派
到同六甲寅仲秋

從寛政六甲寅年
道叟派
到同七乙卯仲秋

從寛七乙卯年
道叟派
到同八丙辰仲秋

從寛政八丙辰年
無端派
到同九丁巳仲秋

下總州栗原寶成寺「泰山」仙陵□

羽州米澤瑞岩寺德岩「玄」了□

羽州米澤東正寺日枝「宗泉」□

奥州仙臺大祥寺「石堂」斑牛□
正

無端開闢
石州三隅龍雲寺禪卓「玄龍」□

下總州千葉郡矢作村千手院「至道」孝淳□
(寺)

羽州秋田永泉寺「鐵山」獨秀「花押」

羽州酒田持地院「提」花押

羽州庄内見龍寺「秀山」大龍「花押」

奥州仙臺大德寺祖苗*
*
*
苗

無端派
二万七千二百廿六世泰山和尚
寶成寺
受業師須山和尚
安永三申年五月
下總之
嗣法師須山和尚
千一
住僧也

(該当なし)

道叟派
二万六千三百四十九世日枝和尚
實相寺
受業師賢宗和尚
明和六己丑年六月
下總之
嗣法師享嚴和尚
二十四日
住僧也

月泉派
三万三千四百十六世斑牛和尚
再公文 大祥寺
受業師湖岳和尚 奥州之
寛政二戌年八月十日
嗣法師靈源和尚 住僧也

(該当なし)

道叟派
三万二千三百三十二世孝淳和尚
再公文 千手院
受業師朴勇和尚 下總州
寛政四壬子年八月八日
嗣法師朴勇和尚 住僧也

道叟派
二万五千七百十三世鐵山和尚
祇園寺
受業師縁翁和尚 羽州之
明和三丙戌年四月二十五日
嗣法師縁翁和尚 住僧也

(該当なし)

(該当なし)

月泉派
二万八千八百四十六世祖苗和尚
保壽寺
受業師祖目和尚 奥州之
天明三癸卯年四月十八日
嗣法師仙壽和尚 住僧也

總持寺五院の成立と展開 (三)

從寬政九丁巳年
道叟派
到同十戊午仲秋

奥州南部瑞雲寺伯峯^{*}

寬政十戊午歲
月泉派
到同十一己未仲秋

羽州秋田補陀寺
□「端相」教嚴「花押」
□

寬政十一己未歲
道叟派
到同十二庚申秋

羽州本庄永泉寺
□「鳳山」一毛「花押」
□

寬政十二庚申仲秋
月泉派
到享和元辛酉秋

奥州仙臺寶鏡寺「震龍」
正
□「運峰」
□

享和元壬歲
道叟派
八月退院

羽州庄内總光寺
□「天翁」貫道「花押」
□

從享和一元戌八月
無底派
到享和三癸亥八月

武州秩父
住見寺代 奥州會津常金寺「巨海」冠龍^{*}
□

從享和三癸亥八月
到文化元甲子八月

月泉開闢 奥州三春龍穩院本然「量義」
□

從文化元甲子八月
到文化二乙丑八月

奥州仙臺永徳寺「眼開」道活^{*}
□

從文化二乙丑八月
到文化三丙寅八月

天心派補住 賀州金澤永福寺「佛壽」道應^{*}
□

從文化三丙寅八月
到文化四丁卯八月

月泉派 上總米原大通寺「仙山」日峰^{*}
□

(該当なし)

(該当なし)

道叟派 道三三二二百八十九世一毛和尚
再公文 永泉寺

受業師一山和尚 羽州之
寬政十一己未年八月八日
嗣法師一山和尚 住僧也

無端派 二万七千四百七十七世運峯和尚
寶鏡寺

受業師慈門和尚 奥州之
安永四乙未年四月二十八日
嗣法師慈門和尚 住僧也

道叟派 二万八千九百八十二世貫道和尚
永進寺

受業師孝順和尚 羽州之
天明四甲辰年八月十二日
嗣法師赦山和尚 住僧也

通幻派 二万九千六百六十五世冠龍和尚
常金寺

受業師翁和尚 奥州之
天明五乙巳年十朔日
嗣法師梅閑和尚 住僧也

(該当なし)

道叟派 二万七千九百九十六世道活和尚
寶壽寺

受業師楚山和尚 奥州之
安永七戊戌年四月二十一日
嗣法師楚山和尚 住僧也

通幻派 二万九千四百三十四世道應和尚
融山院

受業師吞光和尚 加州之
天明八戊申年三月廿日
嗣法師英道和尚 住僧也

月泉派 三万五千五十九世白峰和尚
再公文 大通寺

受業師忍洲和尚 上總之
文化三年丙寅年八月九日
嗣法師千峰和尚 住僧也

從文化四丁卯八月
到文化五戊辰八月

從文化五戊辰八月
到文化六己巳八月

從文化六己巳八月
到文化七庚午八月

從文化七庚午八月
到文化八辛未八月

從文化八辛未八月
到文化九壬申八月

從文化九壬申八月
無端派
到文化十癸酉年八月

從文化十癸酉年
到文化十一甲戌八月

從文化十一戊年
到文化十二亥年

從文化十二亥年八月
到文化十三子年八月

從文化十三子年八月
到文化十四丑年八月

月泉派
奥州南部花卷瑞興寺「大任」百秀□

道叟派
下總栗原寶成寺「頑山」千界□

同國松原補陀寺代住月泉派
羽州二井田温泉寺「麒麟」祖麟□

奥州仙臺湊梅溪寺大東（花押）

道叟派
羽州酒田泉流寺逆流「川」□

石州龍雲寺「機山」白禪□

月泉派羽州瑞岩寺「惠岳」玄定□

道叟派羽州梵照寺「海屋」了因○

無端派羽州米澤東正寺「樹默」泰英□

通幻派補住
越中小竹報恩寺「聯洞」明宗□

無端派
二万八千三百五十一世百秀和尚
圓通寺
受業師活堂和尚 奥州之
安永九庚子年四月十六日
嗣法師芳隣和尚 住僧也

無端派
三万二千八百九十三世千介和尚
寶成寺
受業師泰山和尚 下總之
寛政九丁巳年閏七月十六日
嗣法師泰山和尚 住僧也

（該当なし）

無端派
三万四千四百四十七世大東和尚
照源寺
受業師藏山和尚 奥州之
寛政五癸丑年五月七日
嗣法師慧燈和尚 住僧也

（該当なし）

（該当なし）

無端派
三万五千百八世玄定和尚
長泉寺
受業師隆全和尚 同州之
文化三丙寅年九月廿七日
嗣法師楞屋和尚 住僧也

無端派
三万六千四百三十四世了因和尚
梵生寺
受業師霽外和尚 羽州之
文化十癸酉年三月九日
嗣法師霽外和尚 住僧也

（該当なし）

（該当なし）

總持寺五院の成立と展開 (三)

從文化十四丑八月
到文政元寅八月

月泉派興州南部正音寺「祖覺」泰壽□

從文政元寅年八月
到文政二卯八月

無端派下總白井宗徳寺如實「要山」□

從文政二卯八月
到文政三辰八月

道叟派羽州庄内見龍寺「金山」鐵圓○

從文政三辰八月
到文政四巳八月

興州一ノ関
願成寺代住 能州山田洞雲寺「心學」泰明□

從文政四巳八月
到文政五午八月

道叟派羽州酒田持地院「滿令」秀圓□

從文政五午八月
到文政六未八月

興州仙臺
道叟派代興州古川瑞川寺「能忍」寂點□

從文政六未八月
到同七申仲秋

予代
先住 無端派興州仙臺横山大徳寺「雅峰」傳英□

從文政七申八月
到文政八酉八月

興州三春
龍穩院代 山内覺皇院金猊□

從文政八酉八月
到文政九戌八月

道叟派羽州松山總光寺「泰山」嶽海□

從文政九戌八月
到文政十丁亥八月

興州本庄
道叟派永泉寺「機外」喆俊□

(該当なし)

道叟派
三万千一百一世要山和尚
東禪寺
受業師準毅和尚 下總之
寛政四壬午年六月十八日
嗣法師大頂和尚 住僧也

無端派
三万千七百九十九世金山和尚
見政寺
受業師泰教和尚
寛政六甲寅年四月廿一日
嗣法師泰教和尚 羽州之
住僧也

(該当なし)

無端派
三万八千六百六十六世秀圓和尚
再公文 持地院
受業師圓眼和尚
文政四辛巳年八月八日
嗣法師米親和尚 羽州之
住僧也

太源派
三万八千三百六十五世寂點和尚
瑞川寺
受業師丹源和尚 興州之
文政五壬午年四月十九日
嗣法師圓應和尚 住僧也

(該当なし)

大龍派
三万六千六百六十八世金猊和尚
覺皇院
受業師石翁和尚 本州之
文化十二甲戌年三月晦日
嗣法師祖印和尚 住僧也

無端派
三万七千六百七十八世嶽海和尚
總光寺
受業師貫道和尚 羽州之
文政二卯年四月八日
嗣法師義山和尚 住僧也

無端派
三万九千四百三十二世喆俊和尚
再公文 永泉寺
受業師鳳範和尚 同州之
文政九戌年八月十日
嗣法師徹道和尚 住僧也

從文政十丁亥八月
到文政十一戊子八月

奥州南部
直請疏
東顯寺「普山」亮天□

從文政十一戊子八月
到文政十二己丑交代

羽州秋田
月泉派
補陀寺實翁「玄法」□

從文政十二己丑八月
到文政十三庚寅八月交代

羽州秋田
道叟派
永泉寺獨仙「智峰」□

從天保元庚寅八月
到天保二辛卯八月交代

奥州仙臺
月泉派
大慈寺「大賢」哲宗□

天保二卯八月開山二代五百年四百五十年遠忌相務ム尤モ旧命新命入交リ務
御両尊遠忌之新命也

從天保二卯八月
到天保三辰八月

西江州今津宿
太源派補住曹澤寺巨海「仙學」
* **

從天保三壬辰八月
到天保四癸巳八月

石州三隅
無端派龍雲寺「玉示」寛仲
* *

(該当なし)

無端派
三万三千八百九十三世玄法和尚
羽州之
受業師實山和尚
光明寺
享和二壬戌年四月廿八日
嗣法師海翁和尚
住僧也

無端派
三万五千八百八十七世獨仙和尚
同州之
受業師獨秀和尚
祇園寺
文化七庚午年四月五日
嗣法師獨秀和尚
住僧也

(該当なし)

(該当なし)

無端派
三万四千三百三十五世寛仲和尚
石州之
受業師自宣和尚
福王寺
享和二壬戌年八月十九日
嗣法師寶山和尚
住僧也

洞川庵輪住誌

總持寺五院の成立と展開 (三)

無底派 直請	從天保四癸巳八月 至天保五甲午八月	武州秩父大宮廣見寺〔鐵山〕祖印□
道叟派	從天保五甲午八月十五日 到天保六乙未八月十五日	下總州栗原寶成寺代慈雲寺〔祥山〕仙瑞□
月泉派	從天保六乙未八月 到天保七丙申退院	奥州南部昌歡寺〔戒天〕爲孝□□
月泉派 直請	從天保七丙申八月 到天保八丁酉退院	上總州米原大通寺〔聖山〕諦道□□
道叟派 直請	從天保八丁酉八月 到天保九戊戌八月退院	羽州莊内海晏寺〔海山〕智門□□
三住 月泉派 直請	天保十己亥八月望交代	羽州米澤根岸村瑞巖〔寺〕〔惠岳〕玄定□□
道叟派	天保十一庚 子八月交退	羽州米澤領赤湯東正寺〔樹默〕泰英□□
月泉派 直請	天保十二辛丑 八月交代日	奥州仙臺磐井一ノ関流峠大祥寺桓學□
道叟派 直請	從天保十二年辛丑 中秋交代 至天保十三年壬寅	羽州莊内梵照寺〔圓通〕魯道□□

總持寺住山記

無端派 妙音寺	三万五千七百七十四世祖印和尚 文化六己巳年八月十三日 住僧也	受業師不山和尚 武州之 文化六己巳年八月十三日 住僧也 嗣法師全牛和尚
道叟派 新井寺	三万七千四百四十二世祥山和尚 文化十五戊辰年三月二十日 住僧也	受業師千介和尚 同州之 文化十五戊辰年三月二十日 住僧也 嗣法師千介和尚
(該当なし)	月泉派 三万五千二百四十七世諦道和尚 最勝院 新井寺	受業師泰敷和尚 上總之 文化十四卯年五月十日 住僧也 嗣法師日峰和尚
(該当なし)	無端派 三万五千八百八世玄定和尚 長泉寺	受業師隆全和尚 同州之 文化三丙寅年九月廿七日 住僧也 嗣法師楞屋和尚
(該当なし)	無端派 三万八千三百四十七世祖學和尚 菅生院	受業師玄麟和尚 同州之 文政五年壬午年四月九日 住僧也 嗣法師玄麟和尚
(該当なし)		

道叟派

天保十三重歲從
至天保十四卯八月交代

下總州千葉示胤寺瑞應〔鳳山〕□

同州白井宗徳寺代

大徹派

天保十四卯八月ヨリ
至天保十五辰八月退院

羽州庄内狩川見龍寺代
本州山内覺皇院智寂□

月泉派

弘化元年辰秋
同二年八月退

奥州三春龍穩院佛國〔泰然〕□
江戸年禮相勤

無端派

弘化二年巳秋
同三年八月退院

羽州秋田補陀寺代
本州七尾靈泉寺俊峰〔泰英〕○

道叟派

弘化三年午秋
同四年八月退院

羽州庄内酒田泉流寺〔實山〕大悟□□

道叟派

從弘化四丁未八月
到嘉永元戊申八月

奥州盛岡瑞雲寺天龍□□

無端派

從嘉永元戊申八月
到同曆己酉八月

奥州横山大徳寺岳照〔花押〕

道叟派

嘉永二酉秋
到同三年八月交代

羽州庄内酒田持地院〔智秀〕實參□

通幻派

從嘉永三戌八月
至同曆四亥八月退

奥州膽沢水徳寺代
當國七海萬年寺剛堂□

月泉派

嘉永四亥八月ヨリ
同曆五子八月迄

奥州仙臺本吉〔寶鏡寺〕〔悟山〕得宗○□

無端派

四万千八百六十二世鳳山和尚
宗胤寺
受業師喰龍和尚 下總州之
天保十三年三月十二日
嗣法師同 住僧也

〔該当なし〕

無端派

四万二千七百三十九世泰然和尚
海蔵寺
受業師徳運和尚 奥州之
天保十四年三月十六日
嗣法師同 住僧也

〔該当なし〕

〔該当なし〕

月泉派

四万二千五百五十七世天龍和尚
観林寺
受業師慈音和尚 同〔奥州之〕
天保十三年四月十六日
嗣法師瑞秀和尚 住僧也

〔該当なし〕

〔該当なし〕

〔該当なし〕

月泉派

四万二千二百九十四世得宗和尚
寶鏡寺
受業師良牛和尚 奥州之
天保十二年三月十五日
嗣法師維梁和尚 住僧也

道叟派 直請 三住	從嘉五年八月 至同曆廿年八月交代	羽州松山總光寺「泰山」嶽海□	江府御年禮相勤
道叟派	嘉永六癸丑八月ヨリ 至同曆七甲寅八月交代退	羽州本庄永泉寺「曹巖」愚溪□□	
道叟派	嘉永七甲寅ヨリ 安政二乙卯八月交代	羽州秋田六郷永泉寺活牛 加州年禮相勤△□□	
無端派	安政二乙卯八月ヨリ 至同曆三丙辰八月交代	石州三彌庵雲寺代 同州濱田吉祥寺鐵崖□	
無端派	安政三丙辰八月ヨリ 同曆四日八月交代	本州七尾靈泉寺「大慈」道應○	
月泉派 直請	安政四巳八月ヨリ 至同曆五午八月交代	奥州南部瑞興寺「大覺」海圓□	
道叟派	安政五年八月ヨリ 至同曆六未八月退	下總州栗原玉成寺代 同州八幡町東昌寺「佛海」月船□	
道叟派 直請	從安政六未年八月己 至萬延元庚申八月交代	羽州莊内酒田海晏寺「覺明」全性□□	
月泉派 直請	從萬延元申年八月至 文久元年酉年八月交代	奥州仙臺湊梅溪寺足菴「靈光」□□	
月泉派	從文久元年酉年八月 到文久二戌年八月交代	羽州米澤竹之森瑞岩寺「雪庭」月箒 ^(意) □ 龍甲	

無端派 三万七千六百七十八世嶽海和尚 受業師眞道和尚 羽州之同州之
 總光寺 文政二年四月八日 住僧也
 (該当なし)
 道叟派 四万五千五百三十六世活牛和尚 受業師禪山和尚 羽州之
 永泉寺 嘉永七年八月十一日 住僧也
 無端派 四万五千七百三十八世鐵崖和尚 受業師龍田和尚 石州之
 吉祥寺 安政二年六月十六日 住僧也
 無端派 四万二千八百九十五世道應和尚 受業師泰英和尚 本州之
 大覺寺 天保十五辰年正月十八日 住僧也
 月泉派 四万五千三十四世海圓和尚 受業師大耕和尚 奥州之同州之
 寶昌寺 嘉永八年八月十五日 住僧也
 文公再 四万八千五百四十七世月船和尚 受業師正覺和尚 下総之
 東昌寺 嗣法師徳恩和尚 住僧也
 道叟派 四万二千九百五十七世全性和尚 受業師智門和尚 同州之同州之
 満願寺 天保十五年二月三十日 住僧也
 無端派 四万七千四百四十三世足菴和尚 受業師靈門和尚 奥州之
 梅溪寺 萬延元年八月十二日 住僧也
 文公再 四万七千七百一十一世雪庭和尚 受業師月照和尚 羽州之
 月泉派 天保七年四月二十四日 住僧也
 洞雲寺 嗣法師義産和尚 住僧也

無端派
徒文久二戌年八月
到文久三亥年八月交代

羽州米澤窪田家中千眼寺〔圓宗〕徳明□

直請補住
通幻派
從文久三亥年八月
到元治元年八月交代

加州金澤雲龍寺〔祖室〕洞宗（花押）

直請
月泉派
從元治元年八月
到慶應元丑八月

羽州秋田松原補陀寺〔大印〕未徹□

直請補住
通幻派
從慶應元丑八月
到同二寅交代

甲州若神子村正覺寺〔雲外〕禪峰□

直請
月泉派
從慶應二寅八月
到同三卯八月交代

上總國米原大通寺〔瑞光〕全龍○（花押）

直請
月泉派
從慶應三卯八月
到同四辰八月交代

奥州南部遠山正音寺〔默庵〕哲宗（花押）

補住
太源派
從明治元辰八月
到同二巳八月交代

加州金澤玉龍寺〔玄那〕莫道□（花押）

直請
道叟派
從明治二巳八月
到同三年八月

下總白井宗徳寺〔大永〕弘學○（花押）

再公文
無端派
四万七千九百五十五世徳明和尚
千眼寺
受業師大賢和尚 羽州之
文久三年四月八日
嗣法師大道和尚 住僧也

（該当なし）

再公文
月泉派
四万八千二百八十八世未徹和尚
補陀寺
受業師義隆和尚 羽州之
元治元年八月十一日
嗣法師同 住僧也

同（通幻派）
四万四千六百三十三世禪峰和尚
源昌寺
受業師了禪和尚（甲州之）
嘉永三年九月十八日
嗣法師大珍和尚 住僧也

（該当なし）

（該当なし）

太源派
四万八千七百七世莫道和尚
長國寺
受業師萬光和尚 加州之
文久三年九月十二日
嗣法師道居和尚 住僧也

無端派
四万三千四百八十一世弘學和尚
萬福寺
受業師天和和尚 下總之
天保十三年三月朔日
嗣法師弘道和尚 住僧也

『洞川庵住番記』の巻首には、享保三年（一七一八）八月、伝法庵配下の山内塔頭昌泉寺（廃寺）住僧康観による『洞川庵住番記』成立の経緯が書かれている。それによると、往昔の記録は争乱や災火のためか亡失し見ることができない。今の所録は慶長十五年（一六一〇）八月から翌年八月まで洞川庵に輪住した陸奥正法寺芳朔和尚によるものであるが、その後も七・八年欠如しており、文字も見易くないので、元和四年（一六一八）から紙を改め繕写したとある。また洞川庵は次回に取りあげる伝法庵・如意庵とともに、輪番地寺院も少なく、太源宗真（？）（一三七二）の普蔵院や、先に述べた通幻寂霊（一三三二～九二）の妙高庵に比し、門葉の発展がみられなかったため、勢い欠住が著しくなった。そのため、洞川庵や関三刹は欠住解消に苦慮した挙句、無底・月泉・道叟派など正法寺門徒をはじめ、太源・通幻派などによる助住（与力制度）に依存しなければならなかった。それは妙高庵の項で触れた「五院による總持寺の護持と管理運営」のなかで取りあげた「正法寺文書」——文禄四年（一五九五）七月十五日、總持寺五院が正法寺に對し、洞川庵への助住を要請した——からもわかる。¹⁾

また『洞川庵住番記』の冒頭から、元和四年（一六一八）出羽梵照寺星室広集（道叟派）、同五年、常州竜穩院宏会源益（無底派）、同六年、出羽海安寺笑岩祖聞（道叟派）などが輪住しており、助住は早くから行われていたことがわかる。しかし正法寺門派の洞川庵助住は捗々しくなかったらしく、寛永八年（一六三一）六月六日にも、次のように要請している。

諸嶽山總持禪寺洞川庵塔主職事（原漢文）

貴寺御門派より本庵住番の調法、五院評定を以て相定め候。出羽・奥州両国の門末江欠住無き様仁急度仰せ付けられ指引ならるべきものなり。若し違背の寺庵これあるに於ては、当寺より相計らうべきものなり。但し門末の儀は前々たるべし。仍て衆評件の如し。

寛永八辛未年六月六日 普藏院 印

妙高庵 印

洞川庵 印

伝法庵 印

如意庵 印^②

また万治二年（一六五九）三月八日、関三利が洞川庵に差し出した「覚」にも次のようにある。

覚

一 峨山大和尚三百年忌相當三四年之内訴有之處尤也五哲之門派勸化之儀可然存者也殘餘有之諸山以助力客殿可有建立旨得其意事

一 正法寺派脈月泉道叟両派如先規本寺之門役自今已後仙臺四ヶ寺之僧録正法寺永徳寺両寺以相談洞川庵輪住之儀無欽住様二相勤之旨急度可被申渡事^③（後略）

またさらに元禄七年（一六九四）七月二十五日にも、總持寺は洞川庵の再興もあつて、塔司秀翁院を差し下し、洞川庵再興合力とあわせ、洞川庵助住を要請している。それは正法寺続燈庵に総末寺（無底一派百三十箇寺）が差し出した請書で、次のようにある。

無底一派百三十ヶ寺評定之上申上ル事

- 一 洞仙庵助住之事十年以前々本山並仙臺四ヶ寺江能州總持寺ヲ尊書被相下候テ種々御頼候得共一派中何も貧寺故相調兼罷有候處ニ此度又秀翁院被指下本山與四ヶ寺御相談之上拙僧共評唱可仕旨被仰付候間本山江取協會仕候テ如左申上ル事
- 一 洞仙庵再興⑩ニ付助成可仕旨被仰聞候只今分限相應ニ出錢仕り取廻候而當年々五年目寅ノ年金子拾兩御合力指上可申候事
- 一 洞仙庵輪住當年々十年目充書立之通末代迄無遲滯十年廻リニ一派中助力を以爲相勤可申候爲後日仍如件

元禄七年七月廿五日 總末寺連判

正法寺 續燈庵④

これによると、金子十兩を合力するとともに、十年目毎の助住を約束している。ちなみに洞川庵再興に關係する次のような史料がある。それは洞川庵再興のための用材を遠く北海道に求めていることや、用材の内容、さらには北前船の機構、用材搬送の内情・仕組などの一端がわかるので、繁雜を顧りみず紹介する。

洞川庵御材木送り状之事

（印）極印

- | | | |
|--------|--------|-------------------------------------|
| 一、四本 | 三間ノ丸太 | <small>指渡シ壹尺貳寸
但シシころ庵ノ木</small> |
| 一、六本 | 三間ノ壹尺角 | |
| 一、三拾九本 | 三間ノ八寸角 | |
| 一、三枚 | 三間平物 | <small>中壹尺六寸
厚サ壹尺</small> |

一、八十式本

式間半ノ八寸角

一、百四拾式本

式間ノ八寸角

一、八枚

式間平物

中巻長六寸
厚七寸

一、式本

式間ノ壹尺角

一、四枚

八尺五寸ノ平物

中巻
厚八寸半

一、三本

三間ノ六寸角

一、七拾四本

式間半ノ六寸角

一、百四十八本

式間六寸角

一、式百拾三枚

鹿料板

一、七百五拾挺

播木

一、九本

八尺八寸角

一、拾六枚

七尺五寸板

中巻長七寸
厚六寸半

本数合千五百三品手取木也、右之材木松前江指浜二而、慥二積渡シ申所実正也、尤運員金・積荷・酒手・掛り物等者、此方二而悉相済シ申候、然上八津々浦々諸役・新役・手船・引舟浮取等者、木主毛頭不存候、右之材木能州鹿磯浜二而、庄屋之新屋三郎右衛門殿御差図之木場江、はん立、極印木数相改、急度請取可申候、万一海上之義者、北国廻舟之可爲古法候、為後日之材木送り状如件

松前志摩守家頼
(組込)

江損松山奉行
明石壺左衛門内
材木支配
山本久兵衛
元禄七年
戌六月廿七日
(印)

越前船保舟頭
竹内左次兵衛殿
能州總持寺御寺内
昌泉寺様

また元禄八年（一六九五）には、加賀藩五代前田綱紀からも地材木を拝領^⑥しているが、これらにより洞川庵・同庫裏の規模が類推される。

正法寺に対する洞川庵助住の要請から、洞川庵再興について深入りしたが、『洞川庵住番記』『洞川庵輪住誌』は、元和四年（一六一八）八月十五日の羽州庄内梵照寺星室広集から、明治二年（一八六九）八月十五日の下総臼井宗徳寺大永弘学まで、二百五十二年間に欠住が二十七年（宝永七年へ一七一〇）以降欠住なし）あるが、輪住した寺院数は五十七ヶ寺（欠住時に代行した山内の洞川庵支配下の塔頭昌泉寺・東源寺・秀翁院・慶福寺は含まぬ）、また輪住者は二百二十五名（欠住時に代行した山内の洞川庵支配下塔頭の御影侍者は含まぬ）を数えるが、このうち次に掲げる五名は二回輪住している。

能登靈泉寺湛應守存	元和九年（一六二三）・寛永二年（一六二五）
能登靈泉寺胆顔慧察	寛永四年（一六二七）・寛永六年（一六二九）
出羽瑞岩寺恵岳玄定	文化十年（一八一三）・天保九年（一八三八）

出羽東正寺樹默泰英

文化十二年（一八一五）・天保十年（一八三九）

出羽総光寺泰山嶽海

文政八年（一八二五）・嘉永五年（一八五二）

この五名の輪住をみると、靈泉寺守存と慧察は、一年置きに輪住していること、瑞岩寺玄定は二十五年、東正寺泰英は二十四年、総光寺嶽海は二十七年経過してから再度輪住していることは、いずれも注目する必要がある。

また洞川庵輪住者二百二十五名中、總持寺に出世（転衣）したものは、現在判明している限り百二十九名（五十七％）であるから、未転衣のものが九十六名（四十三％）にのぼっている。これら未転衣のものは元和元年（一六一五）、徳川家康の「總持寺諸法度」にも違背抵触するものである。

次に洞川庵輪住の日時と、總持寺出世転衣の日時の関係をみると、次のとおりである。

（１）總持寺出世後洞川庵輪住まで二ヶ月以上 八十二名

二十年以上 二十一名（最長三十二年十一月、天保九年八月輪住した總持寺三万五千百八世恵岳玄定）

十九年～十年 三十二名

九年～二ヶ月 二十九名

（２）出世直後洞川庵輪住者 三十七名

翌日 一名（天明三年輪住した奥州龍穩院萬元〈總持寺二万八千九百世〉）

三日 四名

四日 三名

五日 三名

六日 十名
七日 九名
八日 二名
九日 二名
十日 二名
十三日 一名

（3）洞川庵輪住中出世者 九名

輪住後 一ヶ月 三名

三ヶ月 一名

退院前一日～四ヶ月 五名

一日 一名（元和五年八月輪住した總持寺三千七十四世源益^{（安）}）

二日 一名

三日 一名

五日 一名

四ヶ月 一名

（4）不明者 一名

寛永十四年輪住した東頭寺崇嶽善寿（總持寺三千七百四十一世）の總持寺入寺が、單に五月廿八日とあるのみで年紀が欠落している。

従来は一旦住持職を経て出世した人の中から五院輪番の再住を選んだとしているが、^{（7）}（1）はこれに該当するが、

(2) は洞川庵輪住にあたり急遽出世転衣を行った感が強いばかりか、出世転衣後上洛し、伝奏勧修寺家を介して朝廷から綸旨を頂戴することも到底不可能である。また「總持寺諸法度」に出世の戒臘は綸旨の日付次第とあり、戒臘が基準となり五院の運営——一老から五老の順位が決まり、それによつて七十五日の現方丈（總持寺住持）の時期や年中行事における紫衣着用も必然的に決定される仕組^⑧など——は如何に処理されていたろうか。今後究明する必要がある。(3)に至つては未転衣者の輪住とともに、従来の説に全く矛盾するもので、これも今後解明する必要がある。

ここで洞川庵輪住について国別・寺院別・輪住回数・門派名その他をまとめ、便宜的に『曹洞宗大本山總持寺御直末・元輪番地寺院名鑑』に準じて列挙するとともに、その問題点について考察する。

武蔵

埼玉 広見寺 4回

無底派 1 2 3 4

※3の享和二年は奥州常金寺冠竜（通幻派）代住。

（空白） 1

道叟派 2

※2の天保十三年は下総宗徳寺の代住。

千葉 宝成寺 8回

道叟派 1 2 3 4 5 6 7 8

※7の天保五年は下総慈雲寺代住。また8の安政五年は下

常陸

茨城 竜穩院 2回

（空白） 1 2

総東昌寺代住。

千葉 東昌寺 1回

道叟派 1

下総

千葉 宗胤寺 2回

千葉 千手院 1回

※1の安政五年は下総宝成寺の代住。

道叟派 1

※寺名が『御直末・元輪番地寺院名鑑』では千手寺となつて
ている。

千葉 慈雲寺 1回

道叟派 1

※1の天保五年は下総宝成寺の代住。

千葉 宗徳寺 7回

（空白） 1 2 4

道叟派 3 6 7

無端派 5

※6の天保十三年は下総宗胤寺代住。

上 総

千葉 大通寺 6回

（空白） 1

月泉派 2 3 4 5 6

甲 斐

山梨 正覚寺 1回

通幻派 1

※1の慶応元年は通幻派補住とある。

近 江

滋賀 曹沢寺 1回

太源派 1

※1の天保二年は補住とある。また「御両尊遠忘之新命也」とある。

石 見

島根 竜雲寺 11回

無端派 1 2 5 6 7 8 9 10 11

（空白） 3 4

※3の延宝三年、4の宝永四年は派名なし。また11の安政

二年は石州吉祥寺代住。

島根 吉祥寺 1回

無端派 1

※1の安政二年は石州竜雲寺の代住。

加賀

石川 雲竜寺 1回

通幻派 1

※1の文久三年は補住とある。

石川 月照寺 1回

太源派 1

※1の宝暦三年は補住とある。

石川 永福寺 1回

天心派^(奥) 1

※1の文化二年は補住とある。

石川 玉竜寺 1回

(空白) 1

能登

石川 霊泉寺 10回

(空白) 1 2 3 4 5 6 7 8

無端派 9 10

※1の元和九年と2の寛永二年は「湛応」守存が二回輪住しており、3の寛永四年と4の同六年は「胆顔」慧察が

二回輪住している。また9の弘化二年は羽州補陀寺の代住をしている。

石川 洞雲寺 2回

太源派 1

(空白) 2

※2の文政三年は奥州願成寺の代住。

石川 芳春院 2回

(空白) 1 2

石川 覺皇院 3回

(空白) 1 2

大徹派 3

※2の文政七年は奥州竜穩院の代住。3の天保十四年は羽

州見竜寺の代住。

石川 万年寺 1回

通幻派 1

※1の嘉永三年は奥州永徳寺の代住。

越中

富山 報恩寺 1回

通幻派 1

※1の文化十三年は補住とある。

陸奥

福島 竜穩院 8回

(空白) 1 2 3 5 7

月泉派 4 6 8

※1の寛文七年は寺名が竜穩寺とある。7の文政七年は能

州寛皇院代住。8の弘化元年には「江戸年礼相勤」とある。

福島 常金寺 1回

無底派 1

※1の享和二年は武州広見寺の代住。なお『御直末・元輪

番地寺院名鑑』は文化元年に的翁顕明が輪住とあるも、

当該年は奥州永徳寺「眼聞」道活が輪住している。

宮城 瑞雲寺 4回

(空白) 1

道叟派 2 3 4

※2の延享元年に貼付紙「南部領十年目当寅卯年」とある。

宮城 瑞川寺 1回

道叟派 1

※1の文政五年は奥州永徳寺の代住。

宮城 梅溪寺 5回

(空白) 1 2

月泉派 3 4 5

※1の寛文十年の上欄に貼付紙「始テ」とある。なお3の

宝暦九年の仙台の台の左横に「正」とある。

宮城 大慈寺 3回

月泉派 1 2 3

※1の享保十四年、2の安永八年の大慈寺の大の左横に

「正」とある。また3の天保元年には「天保二卯八月開

山二代五百年四百五十年遠忌相勤ム尤毛旧命新命入交り

務」とある。

宮城 大徳寺 5回

(空白) 1

無端派 2 3 4 5

※4の文政六年は「雅峰」傳英が輪住しているが、「御直末・

元輪番地寺院名鑑』は「仁英」となっている。落款は傳英である。

宮城 宝鏡寺 3回

月泉派 1 2 3

※1の寛延二年宝鏡寺の宝の左横、2の寛政十二年の仙の

左横に「正」とある。

宮城 天雄寺 1回

(空白) 1

岩手 東顕寺 5回

(空白) 1 2 3

月泉派 4 5

岩手 正音寺 4回

(空白) 1 2

月泉派 3 4

岩手 昌歆寺 4回

(空白) 1 3

月泉派 2 4

岩手 瑞興寺 5回

(空白) 1 2

月泉派 3 4 5

岩手 永徳寺 10回

(空白) 1 2 3 4 8

道叟派 5 6 7 9

通幻派 10

※9の文政五年は奥州瑞川寺代住。10の嘉永三年は能州万

年寺代住。

岩手 願成寺 4回

(空白) 1 4

月泉派 2 3

※4の文政三年は能州洞雲寺代住。

岩手 大祥寺 3回

月泉派 1 2 3

※1の元文四年の大祥寺の「大」の左横、2の寛政二年の

仙台の「台」の左横に「正」とある。

山形 瑞雲寺 1回

道叟派 1

※寺名は『御直末・元輪番地寺院名鑑』によると瑞雲院とある。

出羽

山形 瑞巖寺 8回

(空白) 1 2

月泉派 3 4 5 6 7 8

※6の文化十年と7の天保九年は「惠岳」玄定が二度輪住しており、天保九年には「三住」とある。

山形 東正寺 6回

（空白） 1 2

道叟派 3 4 5 7

無端派 6

※1の寛永七年、2の元禄九年、3の享保八年、4の宝暦二年は寺名が東照寺となっている。また6の文化十二年と、7の天保十年は樹黙泰英が二度輪住している。なお

『御直末・元輪番地寺院名鑑』は寛政六年に活眼盤機が輪住したとしているが、『洞川庵住番記』では羽州持地

院一提及輪住している。

山形 千眼寺 1回

無端派 1

山形 見竜寺 9回

道叟派 1 2 3 4 5 6 7 8

大徹派 9

※1の慶安二年は寺名が建竜寺、2の延宝四年は寺名が乾

竜寺とある。また9の天保十四年は能州山内寛皇院代住。

山形 海晏寺 8回

（空白） 1 2 3 4

道叟派 5 6 7 8

山形 持地院 8回

（空白） 1 2 3

道叟派 4 5 6 7 8

※1の寛永十一年、2の延宝元年、3の宝永二年は寺名が地持院となっている。

山形 泉流寺 5回

（空白） 1

道叟派 2 3 4 5

山形 梵照寺 8回

（空白） 1 2 3 5

道叟派 4 7 8

月泉派 6

※2の寛文九年上欄に貼付紙「元和四年二度目」とある。

山形 総光寺 9回

（空白） 1 2 3

道叟派 4 5 6 7 8 9

※8の文政八年と9の嘉永五年は泰山嶽海が二度輪住しており、嘉永五年には三住とある。また嘉永五年に「江府御年礼相勤」とある。

秋田 観喜寺 1回

(空白) 1

※1の寛永元年は羽州補陀寺の代住。なお『御直末・元輪番地寺院名鑑』では寺名が歓喜寺となっている。

秋田 補陀寺 15回

(空白) 1 2

月泉派 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 15

無端派 14

※1の寛永元年は羽州観喜寺代住。2の寛永十二年は羽州長慶寺代住。12の文化六年は羽州温泉寺代住。14の弘化二年は能州温泉寺代住。

秋田 蔵堅寺 1回

(空白) 1

※1の明和三年は「月泉派補闕」とある。

秋田 永泉寺(本荘) 9回

(空白) 1 2 3 4

道叟派 5 6 7 8 9

※『御直末・元輪番地寺院名鑑』には天明元年に興国寛豊(芳春院住持の時)が輪住したとあるも『洞川庵住番記』は天明元年羽州補陀寺実参が輪住している。

秋田 永伝寺 1回

(空白) 1

秋田 長慶寺 1回

(空白) 1

※1の寛永十二年は羽州補陀寺の代住。

秋田 温泉寺 1回

月泉派 1

※1の文化六年は羽州補陀寺の代住。

秋田 永泉寺(仙北) 9回

(空白) 1 2 3 4 5

道叟派 6 7 8 9

※9の嘉永七年に「加州年礼相勤ム」とある。

まず洞川庵輪住者二百二十五名の派名について考察するが、『洞川庵住番記』の享保四年（一七一九）以前は原則的に記録されていないので、その部分は『曹洞宗大本山總持寺御直末・元輪番地寺院名鑑』によるが、無端派（三十三回）と助住した無底派（八回）・道叟派（九十九回）・月泉派（七十回）が中心であることはいうまでもないが、太源派五回（能登洞雲寺二回、加州月照寺・玉龍寺、江州曹沢寺）、通幻派四回（越中報恩寺・能州万年寺〈奥州永徳寺代住〉、加州雲龍寺、甲州正覚寺）、普濟派（通幻派下）二回（能州芳春院二回）、天心派（通幻派下）一回（加州永福寺）、大徹派三回（能州覺皇院三回）となっている。

また洞川庵に輪住した寺院は、『總持寺史』五院輪番地に掲げられている寺院五十一ヶ寺のすべてと、輪番地以外の寺院である加賀永福寺・玉龍寺、近江曹沢寺、能登芳春院・覺皇院・万年寺など六ヶ寺で、前に触れたように五十七ヶ寺である。これを地域別にみると、東北地方三十四ヶ寺（陸奥十七ヶ寺、出羽十七ヶ寺）が圧倒的に多く、全体のおよそ六十%を占めている。次は北陸地方の十ヶ寺（加賀四ヶ寺、能登五ヶ寺、越中一ヶ寺）、関東地方の九ヶ寺（武蔵一ヶ寺、常陸一ヶ寺、下総六ヶ寺、上総一ヶ寺）と続き、あとは甲斐一ヶ寺、近江一ヶ寺、石見二ヶ寺となっている。

また輪住した五十七ヶ寺を個別的にみると、輪住一回のみの寺院は二十二ヶ寺で、およそ三十八%にあたるが、これらは下総宝成寺、出羽補陀寺などの代住が九ヶ寺、補住七ヶ寺となっている。もっとも多く輪住（代住も含む）しているのは出羽補陀寺の十五回であるが、寛永元年（一六二四）は出羽観音寺、寛永十二年は出羽長慶寺、文化六年（一八〇九）も出羽温泉寺、弘化二年（一八四五）は能登靈泉寺を代住させている。なお輪住の間隔は二十五年から十一年であるが、二百四十一年に十五回であるから、平均すると十六年に一回の割合になる。

次に石見龍雲寺の十一回であるが、安政二年（一八五五）は同州吉祥寺に代住させている。なお宝永四年（一七〇七）以降は、約二十年間隔で輪住している。

また能登靈泉寺と陸奥永徳寺の十回であるが、靈泉寺の場合、先述したように湛応守存と胆願慧察がともに二回輪住している。それ以降は四十五年、あるいは百二年など非常に不規則に輪住している。また永徳寺の場合は、文政五年（一八二二）に陸奥瑞泉寺が、嘉永三年（一八五〇）には能登万年寺が代住している。

次に九回輪住しているのは、いずれも出羽の見龍寺・総光寺・永泉寺（本荘）・永泉寺（仙北）である。まず見龍寺（慶安二年建龍寺・延宝四年は乾龍寺）の場合は、天保十四年（一八四三）に總持寺山内塔頭覺皇院に代住させているが、慶安二年（一六五〇）から天保四年まで百九十四年間に、二十年から二十六年の間隔で輪住しているので、平均すると二十四年に一度輪住していることになる。次の総光寺は承応三年（一六五〇）から嘉永五年（一八五二）まで、百九十九年間に二十二年から二十八年の間隔で輪住しているが、これを平均すると約二十二年に一回の割りで輪住している。なお先述したように、文政八年（一八二五）と、二十七年経過した嘉永五年（一八五二）に泰山嶽海が二回輪住している。また本荘永泉寺は慶安元年（一六四八）から嘉永六年（一八五三）まで、二百六年間に二十四年から三十年の間隔で輪住しているが、平均すると二十六年に一回の割合である。また仙北永泉寺は寛永五年（一六二八）年から嘉永七年（一八五四）まで、二百二十七年間に二十二年から三十七年の間隔で輪住しているが、平均するとおよそ二十八年に一回の割合になる。

そのほか八回輪住している寺院は、下総宝成寺（二回代住）、陸奥龍穩院（一回代住）、出羽瑞巖寺（文化十年、天保九年に恵岳玄定二回輪住）・海晏寺・持地院（寛永十一年・延宝三年・宝永二年は地持院）・梵釈寺である。

また七回は下総宗徳寺（一回代住）、出羽東正寺（文化十二年・天保十年に樹黙泰英二回輪住）、六回は上総大通寺、五回は陸奥梅溪寺・東頭寺・瑞興寺、出羽泉龍寺などがある。

なお無視できないのは、欠住時に仕出した洞川庵支配下の塔頭であるが、昌泉寺十回、東源寺八回、秀翁院四回、慶徳寺三回などである。またそのほかに元禄十一年（一六九八）および宝永七年（一七一〇）は、四塔頭が共同で勤

めている。

最後に問題点として、次のようなものがある。

（1）延享元年（二七四四）、奥州南部瑞雲寺見牛の条の貼付紙に「南部領十年目當寅卯年」とある。

（2）天保元年（二八三〇）八月、輪住した奥州仙台大慈寺大賢哲宗の条と、翌二年八月輪住した江州曹沢寺巨海仙学の条の行間に「天保二卯八月開山二代五百年四百五十年遠忌相勤ム、尤モ旧命新命入交リ務」「御両尊遠忌之新命也」とある。

（3）天保九年（二八三八）八月輪住した、羽州米沢瑞巖寺恵岳玄定の門派名の右傍に「三住」とあるが、それは文化三年（一八〇六）、總持寺火災（正月二十一日、洞川庵は普蔵院とともに焼失を免れる）後の九月二十七日、總持寺に出世し、文化十年および天保九年に洞川庵に二度輪住しているから三住で間違いない。

（4）弘化元年（二八四四）輪住の奥州三春龍穩院仏国泰然の条に「江戸年禮相勤」、嘉永五年（二八五二）輪住の羽州総光寺泰山嶽海の条に「江府御年禮相勤」とある。

（5）嘉永七年（一八五四）輪住の羽州六郷永泉寺活牛の条に「加州年禮相勤ム」とある。

【注記】

（1）栗山泰音『總持寺史』五五二頁参照。

（2）栗山泰音『總持寺史』五五三頁参照。

（3）栗山泰音『總持寺史』五五六頁参照。

（4）栗山泰音『總持寺史』五五四頁参照。

- (5) 『新修門前町史』資料編2 総持寺 一二三頁参照。
- (6) 『總持寺誌』一〇三頁参照。
- (7) 栗山泰音『總持寺史』五三七頁参照。
- (8) 『新修門前町史』資料編2 総持寺九五頁および『總持寺誌』二四六頁参照。
- (9) 栗山泰音『總持寺史』五四四頁参照

※追記

『洞川庵住番記』元和五年八月に輪住した「常州元戸龍穩院」〔宏會〕源益突和尚は『曹洞宗大本山總持寺御直末・元輪番地寺院名鑑』の次城竜穩院の項にも「竜穩七世源益（元和5）」とあるから、『總持寺住山記』の「三千七十世宏會源無端派奕和尚龍穩院」受号玄長和上 元和六年 秋田人事とある「秋田人事」が「常州人事」の誤記であればこれに相当する。なお『延享度曹洞宗寺院本末牒』には「龍穩寺」となっている。